

「読めない」名前はなぜ増えたのか

『四国新聞』「うちの王様」欄の分析

要旨

氏名：香川美和

近年、子どもに「読めない」名前をつけるケースが増えている。「読めない」名前は、ときに物議を醸すこともあり、名前に対する関心は高まっている。「読めない」名前はなぜ増えたのか。本研究の目的は、その背景にあるものを探ることにある。検証するデータには、1997年から2012年の各月1日の『四国新聞』「うちの王様」欄に掲載されている子どもの名前を用いる。

第1章では、データとして収集した名前を、独自の基準によって、「読める」名前と「読めない」名前に分類し、Liebersonの研究を参照しながら、名前の好みには流行があることを示す。第2章では、データから抽出した「読めない」名前を6つに類型化し、分析する。その結果、おとは既存の名前のストックに依拠しながらも、漢字の選択で個性を出す名前が増えていることがわかった。そのために読みと漢字の間に乖離がおこり、「読めない」名前が増える一因となると考えられる。さらに、第3章では、名づけにおいて、視覚情報という新たなファクターが加わったこと、また親自身の価値観の変化によって、本来表現できると考えられていなかったものをさらけ出し、イメージや物語性を付け加えるようになったことが明らかになった。「心」という漢字が、名前に多く用いられるようになったことは、その顕著な例と言える。「見せる」ことを重視して漢字を名づけに用いるために、通常の読みにはおさまらず、結果として「読めない」名前が増えるのである。